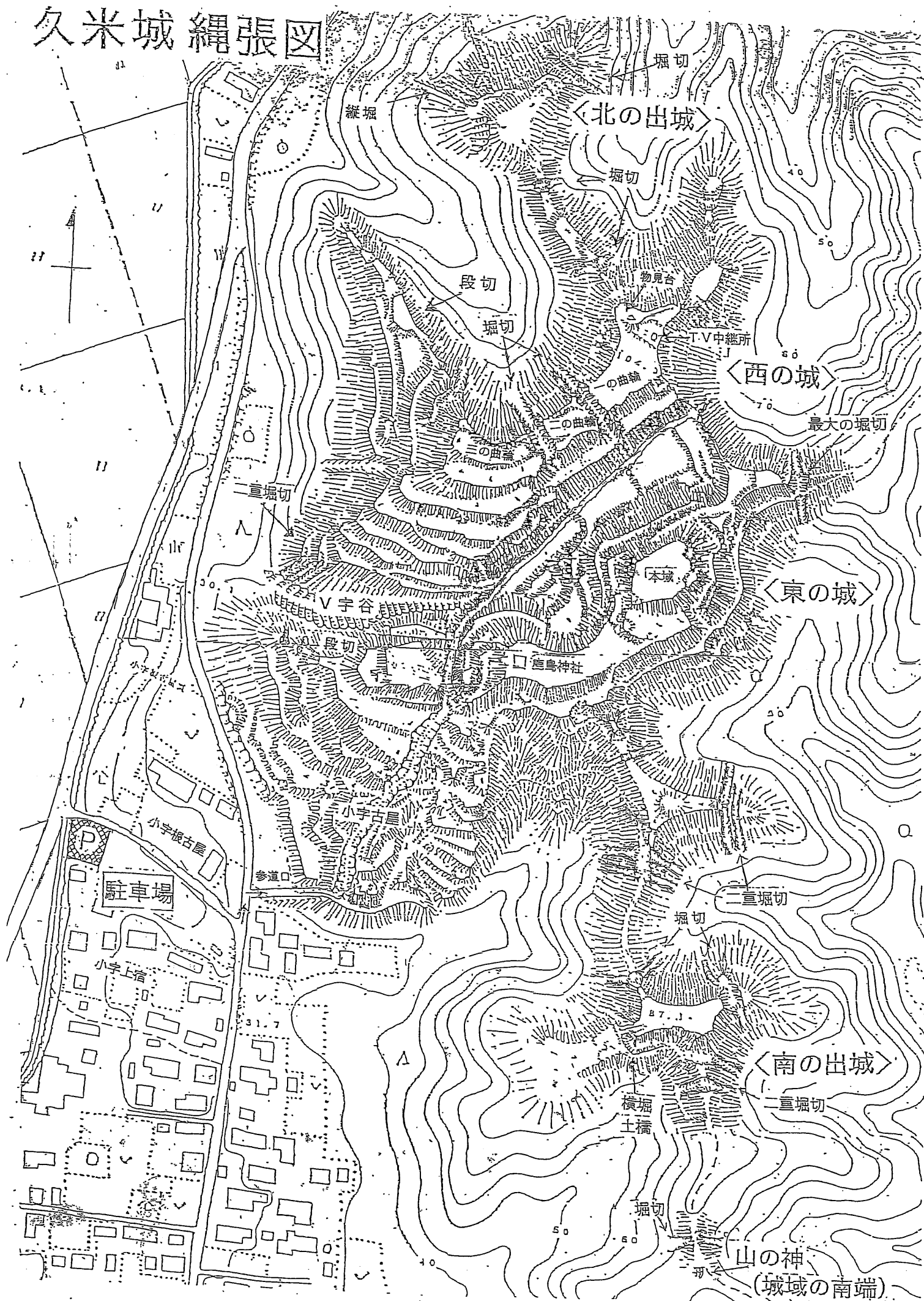


久米城 縄張図



久米城案内

＜歴史＞

鎌倉時代に大掾氏が館を設け居住したと伝えられている。後に小野崎氏が築城して久米氏を名のり代々居城としていたが、3代目の通室に子がなく、小貫頼重の子定春を養子に迎え通治と称した。第15代佐竹義治は山入城の山入氏の反乱に備えて、小野崎系の久米氏を部垂城へ移し、義治の子義武を城主として久米氏を名のらせ防備を強化した。文明10年(1478)11月、山入義知は下野の那須氏の援軍を得て久米城を襲撃し、城主の義武や小田野義安が討死し落城した。久米城には義武の弟義信を城主とし山入氏に備えさせた。この家系が佐竹北家として代々続いた。慶長7年佐竹国替えにより秋田に移り以後廃城になった。

＜縄張の概要＞

久米城は山田川東岸に位置し、久米の集落の北側、鹿島神社のある付近を中心として、集落を囲むような北および東の山に築かれている。城の規模は南北約700メートル東西約300メートル程で、本城のある鹿島神社付近一帯を中心とする「東の城」、谷をはさんで北西にあたるTV中継所の付近一帯を中心とする「西の城」、その北側に「北の出城」、東の城の南側、尾根続きの「南の出城」など、四区画から構成されている。

◆東の城は、鹿島神社後方最高所に本城(郭)がある。その周辺には、二つの虎口や土塁、堀切、帯曲輪などが普請されている。また本城(郭)の北東約80メートルのところには久米城最大の堀切がある。東の城よりこの堀切を渡って東の方角へ向かう道がある。この道は本城の虎口等の遺構とかみ合っており、また東の城の中心部分の側面を添うように配置されていることから、久米城が使われていたところからの道で、太田城と連絡する道筋であった可能性が高い。鹿島神社の西側、一段低い曲輪のV字谷に接する尾根には、侵入を妨げる四つの段切りが普請されている。この段切りから南方へ、参道をまたいで鹿島神社の南斜面にかけ、小字名「古屋」の曲輪群が展開する。

◆西の城は、中継所のある一の曲輪から南西に並ぶ、二の曲輪・三の曲輪の三つの曲輪からなり、それぞれ堀切で区分されている。二・三の曲輪には北からの侵入を防ぐための土塁を設けている。三の曲輪の西側は高さ約70メートルの急斜面が麓まで続き侵入を遮断している。その北端の尾根には六つの段切りが普請されている。一方、東の城とV字谷で接する南端の尾根には、二重堀切と谷側に縦堀があり、続くその上方の尾根には三の曲輪に向けて六段の曲輪が配置されている。V字谷には、谷底を水平に削り、高さ約8メートルの垂直の崖を二か所設け侵入を遮断している。

◆北の出城は、西の城の一の曲輪にある物見台の西側から、尾根伝いに行くことができる。北の出城の南と北東の尾根には堀切があり、北西の斜面には縦堀が設けられている。

◆東の城から南の尾根をいくと二重堀切があり小曲輪に達する。この東と南にも二重堀切がある。さらに尾根を南へ行くと南の出城に至る。南の出城は南西側に横堀が付いており、四方の尾根にも堀切が設けられている。

以上が久米城縄張の概要です。見学にあたっては、城内の主要部を見て回れる見学コースを設置しておりますので、初心者でも迷うことなく見学できるようになっています。

〔城郭用語解説〕

- 虎口—大手、脇手などがその一種。入り口が直進できないように土塁や木戸などを設けたりして、内部を見透かされることを防ぐとともに、侵入を屈折させることによって防御力を高める。
- 土塁—土を盛り上げて築いたしゃべい物で、堀とともに各曲輪を囲む重要な施設である。
- 堀切—山の尾根や合地づたいの侵入を妨げるための施設で、尾根や合地を横断するように掘られた堀。一般に、両端に等高線を垂直に直行するように掘られた縦堀をもっている。「縦堀」は登ってくる敵兵の横の動きを封鎖するために設けられた堀。「二重堀切」は堀切を連続して二重に造ったもので、堅固に侵入を防ぐときになされる普請。
- 帯曲輪—曲輪の側面や城を取り囲むように細長く構築された曲輪をいう。
- 段切—ゆるやかな斜面づたいの侵入を妨げるための施設で、斜面に切岸をほどこすなどして階段状に段を設けたもの。
- 切岸—曲輪の防禦のために、曲輪の周囲を絶壁状に削りとった場所をいう。
- 横堀—等高線と平行に斜面を削り込んで普請される堀。